

詩斗燐★PDF版特別号

小林ブルー美由起

春療治

あつという間に燃え上がった春が
ふすふすと胞子を噴いている

花葦は小さな手を広げてきらめき
ポピーはリズムを刻む

木香薔薇はむくむく増殖し

夕暮れには少しずつ雲になる
青く透き通った春の乳房が
空からいくつも降りてくる

むずかる世界をゆるゆると揺すり
泣き叫ぶ口に乳首をあてがう

世界を調律しようと

春が壊れながら

微笑んでいる

ハンカチ

暗い部屋のなかで
母が泣いていた
しきりにハンカチで
涙をぬぐっているらしかった
丸い背中が
ほのかな月明かりに
ぼんやりと浮かび上がり
ふるえていた
たまらずに電気を点けると
ハンカチだけがあつた
一枚の冷たい泉だつた
目を瞑るように電気を消した
畳の上にハンカチが灯つていた
跪いて水面を覗く
母の顔が見えてくる気がして
あわてて闇へたたみこんだ
指先から冷たく発光しはじめてしまわないよう
水へ戻ってしまわないよう
すばやく
ただすばやく

夕暮れ

夕日が好きだ
夕焼けが好きだ
胸いっぱいに吸い込んで
夜の間痩せてしまう魂に
煙草から煙草へ火を移すように
胸に灯す
朝への長い導火線に
火を付けよう
過去と未来が
口づけをしている時間
燃えている
魔法の光が

月光液

化粧水を瓶に詰め替える夜
少し白濁した月光が
するすると瓶に吸い込まれてゆく
肌のきめ細かさや弾力が
年齢とともに失われてゆくことを
何千年も繰り返してきたのに
諦めきれない
鏡の中の顔は
いつか消える顔
両手に月光をひろげて
顔を浸す
母の顔と出会う